

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

座頭市

配給/松竹、オフィス北野

2003 (平成15) 年9月21日鑑賞

Data

監督・脚本・編集：北野武

原作：子母沢寛

出演：ビートたけし/浅野忠信/大楠道代/夏川結衣/ガダルカナル・タカ/橘大五郎/大家由祐子/岸部一徳/石倉三郎/柄本明

👁️👁️ みどころ

ご存知北野武監督が自ら主演した金髪の座頭市が、第60回「ベネチア国際映画祭」のコンペティション部門で銀獅子賞（監督賞）を受賞した。特に気は進まないものの一応観ておかなければ・・・と思って劇場に足を運んだが、結構上出来。もっとも勝新「座頭市」との比較は無意味。しかし、座頭市は本当に盲目・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<銀獅子賞受賞—新聞各紙は絶賛>

2003年9月6日、第60回「ベネチア国際映画祭」のコンペティション部門で、『座頭市』を主演・監督した北野武が銀獅子賞（監督賞）を受賞することが決定し、日本列島の映画記事は大フィーバーした。新聞各紙は、

- ①「世界のキタノ再び快挙」（2003年9月7日読売新聞）、
- ②「世界のキタノ新たな才能」（2003年9月9日読売新聞夕刊）、
- ③「欧米人とらえたタップリズム」（2003年9月10日毎日新聞夕刊）、

等と絶賛し、さらに朝日新聞「天声人語」（2003年9月8日）、日本経済新聞「春秋」（2003年9月8日）等でも、好意的に、この受賞を取り上げた。

北野武監督は、1997年の『HANA—BI』で、同映画祭の金獅子賞（グランプリ）を受賞以来2度目の受賞だ。また、2003年6月以後、新聞各紙に掲載された多くの映画評論家の評論でも、春岡勇二氏「初の時代劇は太刀さばきも鮮やかだ」（2003年8月14日産経新聞）、中条省平氏「スピード感あふれる殺陣」（2003年9月11日日本経済新聞夕刊）等、絶賛記事のオンパレードだ。

<私の好みは・・・？>

しかし、私はもともと北野武の作品はそれほど好きではない。ヤクザの演技にしても、拳銃アクションにしても、俳優北野武は冷酷な感じを出しているだけで、それほど素晴らしい演技をしているとは思えない。もっとも大橋巨泉が司会をつとめていた人気テレビ番組にレギュラー出演していた頃から、ビートたけしという芸人の才能の凄さは感じていたし、映画監督としての才能もよく分かる。

そして、今何本も持っているテレビのレギュラー番組での仕事を時々見ても、そりゃ凄い人物（才能）であることはよく分かる。しかし私が彼を心から好きだと思わないのは、いつもどこかで「ギャグ」を計算していることが分かるからだろうか・・・？

そう、私は、本来「ギャグ」というものがあまり好きではないわけだ・・・。

<勝新の座頭市との比較は無意味・・・？>

勝新の『座頭市』シリーズ第一作である『座頭市物語』がつくられたのは1962年から、今から40年も前のこと。この原作は子母沢寛の『座頭市物語』であることも当然おさえておくべき基礎知識。以降、勝新の『座頭市』シリーズは1989年までに全26作がつくられた大人気シリーズで、私はきっとその半分～4分の3は観ているはず。高校生の時お近くの映画館で、大学生の時、松山に帰った時に奥道後温泉の中にある自由に観られる映画館で、そのほとんどを観たはずだ。

勝新が田宮二郎とコンビを組んだ『悪名』シリーズ（1961年から全16作）や勝新が田村高廣とコンビを組んだ『兵隊やくざ』シリーズ（1965年以降全9作）についても、私はその半分から4分の3は観ているはずだ。これらはとにかく文句なく面白かった。どの1本として「つまらなかったナァ・・・」と思ったことはなく、それぞれに十分満足したことを今でもよく覚えている。

これら3つのシリーズは、大映の2枚目俳優だった勝新が「よこれ役」になりきり、またその主人公のパーソナリティーを映画ファンに完全に定着させたため、どんなストーリーでもそれなりに面白くつくることができていた。そして、だからこそすべてが標準以上の作品になったのだらうと思う。また藤村志保、坪内ミキ子、高田美和、滝瑛子など、1作毎に共演していたその時その時の女優陣の顔ぶれも忘れることができない。なお、これらの作品にも「ギャグ」はあったが、それは当時のちょっとした「お笑い」であり、ビートたけしが考えるような「どぎつい」ギャグではなかったように私は思う。

今の北野武監督の『座頭市』を観た若者や、ベネチア国際映画祭でこの作品に銀獅子賞を与えた観客の目には、昔の勝新の『座頭市』との対比という視点は全くないはず。単純に「すごいヤン!」「面白いヤン!」ということで、この作品を楽しんでいる人がほとんどだろう。従って、多くの映画評論家が述べているような、勝新『座頭市』との対比の上で、これを観ているのではないはずだ。そして勝新の『座頭市』シリーズ第1作からすでに4

0年もたった今、それは当然のことだし、それでいいのだと私は思っている。

<ユニークなのは金髪とタップダンス、そして見どころはスピード感ある殺陣>

北野武『座頭市』のユニークなところは、金髪とタップダンス。これは確かに面白いし、全然違和感はない。

「時代劇とはこうあるべき・・・」という常識を無視したもので、まさに北野武の才能そのもの。特にタップダンスはいい。私も大いに楽しむことができた。

そしてこの映画の見どころは、「スピード感あふれる殺陣」とされている。たしかに、北野武監督がすべて自分で工夫したと言われている殺陣はスピード感も迫力もあり、そして映像も美しい。

しかし・・・。

今は映像技術がすごく進歩しているから、編集したり、スローモーションを使ったりのテクニックによって、かなり「ゴマかせる」のでは・・・？とつい勘ぐってしまうが、これはゲスの勘繰りか・・・？でも勝新「座頭市」のバツバツと切り倒していく殺陣は、あの当時の映像技術の下では、そりゃすごいのだったはず。映画評論家のみんなが同じように北野武讃歌を歌うのではなく、誰か1人くらいはそういう技術的なことも含めた「役者」の演技力のレベルなどを解説して欲しいものだが・・・。

<よくできたストーリー>

ストーリーは時代劇によくあるパターンを踏まえたもの。そして意外(?)なことに必ずしも座頭市の対決シーンだけがメインではない。すなわち

- ①御前試合で素浪人の実戦戦法に叩きのめされ、浪人者となった武士(浅野忠信)の生きざま
- ②旅芸人の姉妹(実は弟)(大家由祐子)、(橘大五郎)の仇討ちドラマ
- ③まちで野菜を売るおばさん(大楠道代)やその放蕩息子(ガダルカナル・タカ)の生活感

が、かなりのウエイトをもって描かれている。

他方、「悪役」は、悪代官とつるんだ銭ゲバ商人(岸部一郎など)というのが「相場」。もちろんこの作品でもそれを踏襲しているが、実はもう少し奥深いストーリーが隠されているところがリアルで面白い。

果たして映画の進行中、この隠されたストーリーを見抜ける人が何人いるだろうか・・・？このように全体のストーリーはよくできており、1時間56分と割と長い作品ながら、飽きることはなく最後のタップダンスのシーンまで流れこむことができる。

<やめてほしいつまらないギャグ>

金髪やタップダンスを取り入れた『座頭市』というのは、それだけで、ビートたけし流のギャグだろうが、これは製作の基本スタンスというべきもので、私は十分納得。

しかし「つまらない」ギャグはやめてほしい。それは2回ある。

1回目は、バクチ場で暴れ回った座頭市と遊び人の新吉（ガダルカナル・タカ）、そして旅芸人姉妹が、蓑笠姿に身を隠し、大八車を引っ張って、まちから脱出し、おうめ（大楠道代）の家にたどりつき、一息ついている時に見せるギャグ。うまく脱出できるようにするため、何と、座頭市の見えないはずの閉じられた目の上に、絵の具でくっきりと、臉を2つ描いている顔を見せるシーンだ。

そして2つ目は、最後の最後のシーン。座頭市がつかずいてころび、目を・・・。

パンフレットの中で北野武監督は、「それ以上やったら映画が壊れるし、少なくともつままないし。綱渡りみたいなお笑いなんだよ。意外とお笑いの部分は一番気を使ったね。」と述べているが、このつまらないギャグの分だけ作品の価値が落ちるのではないかと私は感じているが、果たしてどうだろうか・・・？

＜座頭市の目は見えるの・・・？それとも見えないの・・・？＞

勝新『座頭市』では、座頭市は盲目のあんまさん。

この約束事は絶対的なものだし、すべてのストーリーはそれを前提として成り立っていた。

しかし本作品は・・・？

何と「目を見開いた」座頭市が・・・？

果たしてこれは・・・？

最後の悪党退治のシーンで出てくる「めくらの方が人の気持ちがわかる・・・」というセリフは、いやはや何と評価すればいいのやら・・・？

パンフレットで、北野武監督が、「座頭市の設定自体、大体目が見えないのにあんなに強いわけがないじゃない？でも、それは言わない約束にしようってのが、時代劇のルールだから。」と述べている通り、こういう暗黙ながら絶対的なルールがあるからこそ、勝新の座頭市シリーズ全26作が成り立ってきたわけだ。

そうすると、本作品は「掟破り」の「座頭市」か・・・？

2003（平成15）年9月22日記